

里芋の芽と不動の目

森鷗外

青空文庫

東京化学製造所は盛さかんに新聞で攻撃せられながら、兎とに角かく一ひと廉かどの大工場になった。

攻撃は職工の賃銀問題である。賃銀は上げて遣やれば好い。しかしどこまでも上げて遣るといふわけには行かない。そんならその度合はどうして極きまるか。職工の生活の需要であろうか。生活の需要なんぞというものも、高まろうとしている傾かたむきはいつまでも止まることはあるまい。そんなら工場の利益の幾分を職工に分けて遣れば好いか。その幾分というものも、極まった度合にはならない。

工場を立てて行くには金がいる。しかし金ばかりでは機関が運

転して行くものではない。職工の多数の意志に対抗する工場主の一人の意志がなくてはならない。工場主は自分の意志で機関を運転させて行くのである。

社会問題にいくら高尚な理論があつても、いくら緻密な研究があつても、己は己の意志で遣る。職工にどれだけのものを与えるかは、己の意志でその度合が極まるのである。東京化学製造所長になつて、二十五年の間に、初め基礎の危かつた工場を、兎に角今の地位まで高めた理学博士増田翼はかく信じているのである。製造所の創立第二十五年記念の宴会が紅葉館で開かれた。何某の講談は塩原多助一代記の一節で、その跡に時代な好みの紅葉狩と世話に賑やかな日本一と、ここの女中達の踊が二組あつ

た。それから饗^{きよう}応^{おう}があつた。

三間^ま打ち抜いて、ぎっしり客を詰め込んだ宴会も、存外静かに済んで、農商務大臣、大学総長、理科大学長なんぞが席を起たれた跡は、方々に群をなして女中達とふざけていた人々も、一人帰り二人帰って、いつの間にか広間がひっそりして来た。

もう十一時であらう。

今日の主人増田博士の周囲には大学時代からの親友が二三人、製造所の職員になつてゐる少壮な理学士なんぞが居残つて、燭^{かん}の熱いのをと命じて、手あきの女中達大勢に取り巻かれて、暫^{しば}く一夕^{せき}の名残を惜んでゐる。

花房^{はなぶさ}という、今年卒業して製造所に這^{はい}入つた理学士に、児^{ちご}ま

鬚げに結った娘が酌をすると、花房が顧みながら云った。

「何だ。お前の袖そでからは馬鹿に好いい匀においがするじゃあないか。何を
持っているのだ。」

「これなの。」

娘が絹のハンケチを取り出した。

「それだそれだ。匀で思い出したが、ここの内に丁度お前かのよう
な薫かおるという子がいたが、あれはどうした。」

「薫さんはお内へ帰りましたの。」

「内は何だい。」

「お医者さんですわ。」

「おお方誰たれかが一い旦ったん内へ帰して置いて、それからお上かみさんにす

るというようなわけだろう。」

「知りませんわ。」

こんな話をしているうちに、れんそう 聯想は聯想を生んで、台湾の樟しょう ようのう 腦の話が始まる。樺太からふとのテレベン油の話が始まるのである。

増田博士は胡坐あぐらを搔かいて、大きい剛こわい目の目尻めじりに皺しわを寄せて、

ちびりちびり飲んでゐる。抜け上がった額の下に光っている白目

勝がちの目は頗すこぶる剛い。それに皺を寄せて笑っている処がひどく優し

い。この矛盾が博士の顔に一種の滑稽こっけいを生ずる。それで誰でも

博士の機嫌の好い時の顔に対するときには、微笑を禁じ得ないのである。

誰やらが、樺太のテレベン油は非常な利益になりそうで、始て

製造を試みた何某の着眼は実にえらいという評判だと云うと、黙つて酒を飲んでいた博士が短い笑声を洩した。

「あれか。あれは樺太へ立つ前に己おれの処へ来たから、己が気を附けて遣つたのだ。」

一同耳を欻そぽだてた。この席にいるだけのものは、皆博士が人の功を奪うような人でないことを知っている。それだから、皆博士のこの詞に信を置くのである。博士は再び無邪氣らしい、短い笑声を洩もらして語り続けた。

「あればかりではないよ。己の処へは己の思付を貰もらいに来る奴が沢山あるのだ。むつかしく云えば落想とでも云うのかなあ。独逸ドイツ語なら Einfalle 《アインフェルレ》 勻とでも云うのだろう。し

かし己は嘘うそは言わないから、誰も落ち込みはしない。己は遣つて来る人の性質や伎倆ぎりようや境遇を見て、その人に出来しごとそうな為事を授けるのだ。それで成功したものが、これまでに随分あるよ。妻がいつも傍そばで聞いていてそういうのだ。あなたそんなにお金になるような事を沢山知つていらつしやるなら、御自分で少しして御覧なすつてはどうですと云うのだ。女なんというものは馬鹿なものだ。なんでも余所よそですする事を好い事だと思つている。己には己の為事がある。己なんぞは会社の為事をして給料を貰つていりやあ好いのだ。為事は一つありやあ好いのだ。思付しづなんぞはいくらでもあるから、片っ端から人にくれて遣る。それを一つ掴つかまえて為事にする奴が成功するのだ。中には己の思付で己より沢山金を

こしらえるものもある。金が何だ。金くらい詰まらないものが、世の中にありやあしねえ。」

博士はそろそろ巻^{まき}舌^{した}になって来た。博士は純粹の江戸子^{えどっこ}で、何か話をして興に乗じて来ると、巻舌になって来る。これが平生寡言沈黙の人たる博士が、天賦の雄弁を發揮する時である。そして博士に親しい人々、今夜この席に居残っているような人々は、いつもこういう時の来るのを樂み待っているのである。

博士は虚^{から}になった杯を、黙って児^{ちご}鬚^{こまげ}の子の前に出して酒を注がせて、一口飲んで語り続けた。

「金が何だ。会社は事業をするために金がいる。己^{おれたち}はいらねえ。己^{おれたち}達夫婦が飯を食って、餓鬼^{ども}共の学校へ行く^{ぜに}銭が出せれば好い。

金を溜^ためるようなしみつたれは江戸子じゃあねえ。」

こういう話になると、独り博士の友達が喜んで聞くばかりではない。女中達も面白がつて聞く。児鬻^{こわ}の子供も、何か分からないなりに、その爽^{そう}快^{かい}な音吐^{おんと}に耳を傾けるのである。

^{ごましおあたま}胡麻塩頭を五分刈にして、金縁の目金を掛けている理科の教授^{いしぐり}石栗博士が重くろしい語調^{くちばしい}で喙^{くちばし}を容れた。

「一体君は本当の江戸子かい。」

「知れた事さ。江戸子のちやきちやきだ。親父は幕府の造船所に勤めていたものだ。それあの何とかいう爺^じいさんがいたつけなあ。^{かつやすよし}勝安芳よ。勝なんでも苦勞をしたが、内の親父も苦勞をしたもんだ。同じ苦勞をしても、勝は韃^{しわ}い命を持っていやあがるから生

きていた。親父はこつくり行き着いたのだ。病氣も何もないのに死んだのだ。兄きは大鳥圭介けいすけに附いて行つちまう。お袋と己とは広徳寺前の屋敷にぼんやりしていると、上野の戦争が始まった。門番で米擣こめつきをしていた爺いおが己を負ぶつて、お袋が系図だとか何だとかいうようなものを風炉敷ふうろしきに包んだのを持って、逃げ出した。落人おちうどというのだな。秩父在ちちぶざいに昔から己の内に縁故のある大百姓がいるから、そこへ逃げて行こうというのだ。爺いじの背中で、上野の焼けるのを見返り見返りして、田圃道たんぼみちを逃げたのだ。秩父在では己達を歓迎したものだ。己の事を江戸の坊様と云つていた。」

「なんでも江戸の坊様に御馳走をしなくちやあならないというの

で、蕎麦そばに鳩はとを入れて食わしてくれたつけ。鴨南蛮かもなんばんというのは

あるが、鳩南蛮はあれつきり食った事がねえ。」

「そうしていると打ぶつこわし毀こわという奴が来やがった。浪人ものとい

うような奴だ。大勢で押し込んで来やがるのだ。親父がびよこび

よこお辞儀をして、酒樽さかだるの鏡を抜いて馳走ちそうをしたもんだから、

拍子拔がして素直に帰って行きやあがった。ところが二三日する

とまた遣しがりつて来やがった。倅せがれの方は利かねえ気の奴だったから、

野猪狩しがりに持つて行く鉄砲を打ち掛けた。そうすると奴共慌あわてて逃

げてしまやあがった。」

「そのうちに世間が段々静かになって来た。己は毎日毎日土蔵しめなわの

脇わきで日なたぼっこをしていた。頭の上の処には、大根が注連縄しめなわの

ように干してあるのだな。百姓の内でも段々厭あきて来やがって、もう江戸の坊様を大事にしなくなつた。鳩南蛮なんぞは食わしやあしねえ。」

「ある日の事、かますというものに入れた里芋を出しやがって餓鬼共にむしらせていやあがるのだ。餓鬼は大勢いたのだ。むしつて芽の所を出して見て、芽の闕かけた奴は食う方へ入れる。芽の満足でいる奴は植える方へ入れるのだ。己が立つて見ていると、江戸の坊様も手伝つてお遣やりなさいと抜かしやあがる。大ぶ江戸だいの坊様を安く踏むようになりやあがつたんだな。こうなつちやあ為しかた方がねえ。己もそこへ胡座あぐらを搔かいて里芋の選より分わけを遣つ附けた。ところか己はちびでも江戸子だ。こんな事は朝飯前だ。外の餓鬼ほかが

策さるに一ぱい遣るうちに、己は二はい遣るのだ。百姓奴めびつくりしやあがつた。そして言い草ぐさが好いや。里芋えりわけの選分は江戸の坊様に限ると抜かしやあがる。」

「そのうち、もう江戸へ帰つても好きそうだというので、お袋と一しよに帰つて来た。兄きは今の戸山学校の処に押し籠こめられていたものだ。お袋は早く兄きが内へ帰られるようにというので、小さい不動様の掛物を柱に掛けて、その前へ線香を立てて、朝から晩まで拝んでいた。」

「そこへ兄きがひよっこり帰つて来た。お袋が馬鹿に喜んで、こうして毎日拝んだ甲斐かいがあると云つて不動様の掛物の方へ指ざしをしたのだ。そうすると、兄きは妙な奴さ。ふうん、おつ母さん

はこんな物を拝んだのですかと云つて、ついと立つて掛物の前に行つて、香炉に立ててある線香を引っこ抜くのだ。己はどうするかと思つて見ていたよ。そうすると、兄きは線香の燃えている尖さきを不動様の目の所に追つ附けて焼き抜きやがるのだ。片つ方が焼穴になつたら、また片つ方へ押つ附けて焼き抜きやあがるのだ。とうとう両方共焼穴にしてしまやあがつた。」

「兄きは妙な奴だつたよ。それ何とか云つたつけ。うん、田口卯う吉きちというのだ。あれなんぞが友達だつたのだ。旧思想の破壊というような事に、恐ろしく力ちから瘤こぶを入れていたのだな。不動様の罰だか、親の罰だか、知らねえが、間もなく病氣になつて死んじまやあがつた。」

「まあ言つて見れば、Fanatiker 《ファナチケル》 というような人間だったのだな。古くなつたがらくたを取り片附けなけりやあならない時代には、あんな焼けな人間も道具かも知れない。兄きなんでも、廻り合せでは大きい為事しごとをしたのかも知れねえんだよ。」

「己なんでも西洋の学問をした。でも己は不動の目玉は焼かねえ。ぼつぼつ遣つて行くのだ。里芋をよ選り分けるような工合に遣つて行くのだ。兄きなんぞの前へ里芋の泥だらけな奴なんぞを出そうもんなら、かます籠かごめ百姓の面つらへ敲たたき附けちまうだろうよ。」

「己は化学者になつて好かつたよ。化学なんという奴は丁度己の性分に合っているよ。酸素や水素は液体にはならねえという。な

らねえという間はその積りで遣っている。液体になっても別に驚きやあしねえ。なるならなるで遣っている。元子^{げんし}は切ったり毀^{こわ}したりは出来ねえ。Atom 《アトオム》は atemnein 《アテムネイン》で切れねえんだという。切れねえという間はその積りで遣っている。切れたって別に驚きやあしねえ。切れるなら切れるで遣っている。同じ江戸子でも、己は兄きのような Fanatiker 《ファナチケル》とは違うんだ。どこまでもねちねちへこまずに遣って行くのも江戸子だよ。ああ馬鹿に饒舌^{しゃべ}ったな。もう何時だろう。

花房は小さい金時計を出して見た。

「十二時です。」

「そうか。諸君は車が待たせてあるから好いが、己はぐずぐずすると電車に乗りはぐれる。さあ、行こう行こう。」

（明治四十三年二月）

青空文庫情報

底本：「普請中 青年 森鷗外全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月刊

入力：鈴木修一

校正：mayu

2001年7月31日公開

2005年11月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

里芋の芽と不動の目

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>